

藤本文庫（和書）の搬出について

——大分大学編

石井 まこと

- 1 搬出までの経緯
- 2 受け入れた書籍
- 3 労働科学研究所の社会科学調査について

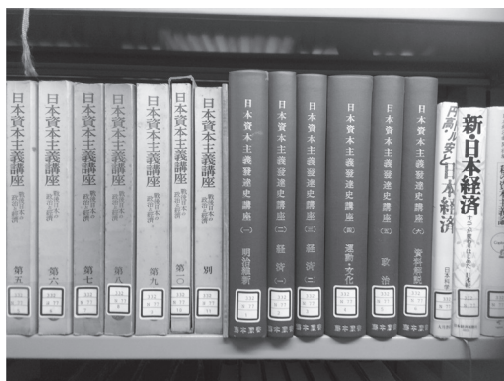
1 搬出までの経緯

私は1995年4月から1998年3月までの短時日であったが、旧労働科学研究所（以下、労研）の当時の第三研究部（旧社会科学研究室、経済学研究室）研究員として勤務していた。この第三研究部は主として労研の社会科学系の研究を行う組織であり、かつて藤本武先生はその中核を担い、一方で第12期（1972～74年）の社会政策学会の代表幹事として、私が学部生・院生時代に師事した下山房雄事務局長とともに日本の社会政策研究の発展に尽力した方である。

藤本先生には私が第三研究部に勤務していた時、同窓会的新年会で一度お会いしたことと、労研に資料閲覧に来られた時にお会いした程度であった。当時、私が争議研究をしていたことを藤本先生が知っていたかどうかは定かではないが、当時20代末の若輩者に『ストライキの理論と歴史』に一筆入れた献本を頂いたことは身に余る光栄な出来事として記憶に残っている。

さて、藤本先生が2002年にお亡くなりになられてから、先生の書齋にあった書籍やメモが労研にダンボールで500箱程度が運び込まれ、労働科学研究所の地下3階に「藤本文庫」として収納されることになったと聞いている。「藤本文庫」は藤本先生の自宅にあった個人収集の書籍である。先に述べたように膨大な数の書籍であり、労研の移転に伴って、所蔵するスペースがないとのことで受け入れ先を関係者がそれぞれのルートで探し、可能な限り資料が残るように尽力した。

私が担当したのは、藤本文庫の和書の蔵書群の搬出である。私がはじめて搬出作業に関わった2015年7月29日にはすでに、洋書部分は専修大へと搬出が終わっており、残すは和書と藤本先生が書き残した大量の直筆ノートや原稿の一群であった。このとき、偶然に立教大学への搬出作業を計画していた関東学院大学の田中聡一郎氏と出会い、それぞれの大学に搬出するものについて打ち合わせを行い、直筆ノートおよび和書で他大学研究機関にも所蔵が少なく貴重な文献は立教大学の菅沼隆氏に引き受けて頂くことになった。立教大学への搬出作業が終了した後の2015年9月3日に元労研研究員の赤堀正成氏にも助力をお願いし、大分大学経済学部で受け入れ可能な図書の選定を行った。



労働科学研究所・藤本文庫（和書）（2015年7月29日撮影）



大分大学経済学部石井研究室へ搬送した書籍（2016年3月11日撮影）

左：搬出した書籍（ダンボール梱包状態），右：藤本先生執筆の委託調査報告書



藤本蔵書 左：ヴォルガ『世界経済年報』，右：『日本資本主義発達史講座』

2 受け入れた書籍

本来であれば藤本文庫をすべてまると引き受けてくれるところがあればと社会政策学会員や旧労研第三研究部の先輩方にも声かけを試みた。関心をもって頂いた方はいらっしゃったが、どの大学・研究機関も蔵書のスペースには悩まされていること、さらにコレクションは貴重な本もあるものの、すでに多くの図書館で配架されている書籍も多数あり、すべてを引き受けて頂けるところはなかった。労研の旧ホームページ「藤本文庫」(<http://rouken.sakura.ne.jp/ex-rouken/ISS/library/fujimoto/index.html>)には、書架の写真、鷺谷徹氏による藤本先生の業績解説が掲載されている。鷺谷氏の文章とホームページに掲載されているに蔵書リストを眺めると藤本先生がどのように勉強をしてきたのかが分かる。蔵書は1920年代後半の書籍からはじまり、歴史、思想、哲学、経済・産業、生活、農業・食料、法律、労働組合、社会保障と社会科学を網羅する書籍群である。

大分大学経済学部でも蔵書スペースはないため、大分大学に所蔵していない本を選書して、とりあえず石井研究室へ配架することとし、搬出作業を開始した。まず、学部生に協力を依頼し、本学の図書館に入っていない和書を選出してもらった。50頁にもおよぶ和書リストの冊数にすると3000冊を超える蔵書のなかから大分大学に所蔵していない600冊程度を引き受けることになった。全体の2割程度の搬出にしかないものの藤本文庫が大分大学にて閲覧できることが可能になると考え、搬出作業を進めた。

ダンボール箱でちょうど20箱に収容でき、現在も石井研究室で保管している。これから、移動させた書籍の一覧を作成し、何らかの形でリストを公開する予定である。現在の「藤本文庫」のホームページにリンクをつけて、搬出したものが分かるようにしたい。可能であれば大分大学附属図書館での配架が望ましいが、本図書館も寄贈本を受け入れるスペースには乏しいため、当分は研究室での保管となっている。

搬出した書籍のなかには「藤本蔵書」として1929年の世界恐慌の接近を予測したヴァルガ著『世界経済年報』第1輯～31輯（叢文閣）や、『日本資本主義発達史講座』全6巻（岩波書店、1932～33年）が入っている。また、唯物論関係の書籍も多くあり、『唯物論全集』（三笠書房、1935～37年）も揃っている。この他は相対的に歴史関係の書籍が多くなっている。それは晩年1996年に上梓された『アメリカ資本主義貧困史』（新日本出版）の作成へと結実していくことが理解できる。その他、労働問題を研究する者にとって貴重な書籍が集められており、藤本先生の勉励ぶりが偲ばれる。

なお搬出した『社会政策学会年報』および『社会政策叢書』については、明治大学の遠藤公嗣氏により図書館でお引き受け頂けることになり、20箱のうちの2箱を明治大学へ大分大学より搬送した。

3 労働科学研究所の社会科学調査について

藤本文庫とともに、労働科学研究所の多くの社会科学関係の蔵書や報告書も保管先に困ってい

た。私が所属していた第三研究部は藤本先生のもとで社会科学研究室や経済学研究室と呼ばれていた。1955年から藤本先生を中心に食糧問題に関する食糧庁の調査を行っている。この報告書『主食消費の階層別研究』（第3～6年度、1957～1960年）や『家計と栄養状態の分析』（1956年）なども搬出した。また、全国モーターボート競争施行者協議会からの委託研究で藤本先生による調査報告書『モーターボート競争選手の賞金等に関する調査』（1976年）といった、労使の間に入り科学的中立的な立場で労働条件を提示する労働科学研究所が最も得意とする記録も労研の許可を得て、藤本文庫とあわせて搬出した。

この他、貴重な報告書等あったに違いないが、その一部しか搬出できなかった。私が研究員時代に、野沢浩先生から、日本が終戦直後の占領期にサマータイム制度（昨年は国家公務員の「ゆう活」で話題になった）を実施していた時の影響調査記録が労働科学研究所の資料庫にあると聞いていた。どこかに搬出されているはずだが、今となっては確認できなくなっている。

以上が「藤本文庫」の大分大学経済学部石井研究室に搬出している書籍についての解説である。貴重な書籍群であり、所在を明らかにするためにも、上述したように本年度中には書籍一覧を作成し公開していく予定である。

（いしい・まこと 大分大学経済学部教授）